

令和四年度 前期入試問題 解説

【五〇分・一〇〇点・詳細非公表】

【一】説明的文章（論説）

〈出典〉『不安の哲学』

パンデミックや災害などによる不安が社会全体を覆う今、アドラー心理学の第一人者である岸見が不安の正体を問う著書。社会の不安のみならず、今この瞬間も多くの人が抱えている対人関係や仕事、病、死への不安を取り上げ、その原因と脱却への道を模索している。キルケゴール、アドラー、三木清などの思想を手がかりに、不安に囚われず前を向く道を示していく。

〈著者〉岸見 一郎

一九五六年、京都市生まれ。哲学者。京都大学大学院文学研究科博士課程満期退学（西洋古代哲学史専攻）。専門の哲学（西洋古代哲学、特にプラトン哲学）と並行して、一九八九年からアドラー心理学を研究。主な著書に『嫌われる勇氣』『幸せになる勇氣』（古賀史健と共著、ダイヤモンド社）、『幸福の哲学』（講談社）、『今ここを生きる勇氣』（NHK出版）などがある。

問一 漢字の読み書き

漢字は音読み・訓読みを確認して学習すること。どれも中学校までに既習の漢字である。漢字の理解は文章読解の要、日々の学習で意識して取り組もう。

問二 対比（比較）・同義説明

筆者の主張の要旨となる「エクセント

リック」な生き方とは、どのような生き方を指すのか。受験生には本文全体を通して論理的に読解、解釈する力が求められている。

「常識的」な生き方と、対比（比較）しつつ「エクセントリック」な生き方と同義関係の記述の論展開を捉え、一文と一文の論理、段落間の論理、全体の論理を整理しながら読解していくことが必要である。エクセントリックな生き方について、傍線部前後の文を読むと、筆者は「自然に定められている中心から離れて」「主体的にその存在中心ともいえるべきものを定立しなければならぬ」と叙述している。

つまり、人生は、常識的な価値観のもと「決められたレール」に従って生きる必要はなく、他者や世間からの「期待を満たすため」のものでもない。そのようなエクセントリックな、人とは異なる生き方を選べば「責任は全て自分に降りかかってくる」ため、不安な気持ちを抱くことになるが、主体的に生き方を形成できるといえる「自由」を得ることができる。以上のもをまとめたアが解答である。

イについて、自分の人生は何らかの論理なしに存在しているものであるため、不安を抱えながらも、人とは異なる生き方を選択するような生き方のこと。↓「自分の人生は何らかの論理なしに存在している」というのが誤り。中心が「自明のものとして与えられている」とするのは、常識的な生き方であり、エクセントリックな生き方とは異なる。

ウについて、特定の価値観にとらわれず、積極的に中庸の観点から人生を捉え、自由意志を持って自分の人生を定立するような生き方のこと。

↓「積極的に中庸の考えから人生を捉え」が誤り。筆者は文中で「エクセントリックになり得ることが人間の特徴であり、それ故にこそ古来あのようにしばしば中庸ということ、ほどほどにということが日常性の道徳として力説されなければなかった」とある。「しばしば」「ほどほどに」中庸であることがエクセントリックな生き方であり、「積極的に」中庸の観点から生き方を捉えることは、筆者の主張として適当ではない。

エについて、社会と調和することを意識して、着実に安定した一度決めた生き方を貫くような生き方のこと。  
↓これは「常識的な生き方」の説明になっている。設問で問われているのは「エクセントリックな生き方」であるため誤りである。

### 問三 対比(比較)説明

本文において、常識的な生き方とは、自分の人生は「自明のものとして与えられている」と考えるため、エクセントリックに生きる必要を感じずに、「まわりの社会とも調和して生きる」ように常識に縛られたものがある。したがって、ア・イ・エは正しく、誤っているのは、ウである。ウについて、安定的な生き方があったとしても、集団の価値観に左右され

ずに、自分の人生を自由に選択するような生き方。

↓問二でみたように、エクセントリックな生き方の説明になっているため、誤りである。よって解答はウである。

問四 空欄補充(接続詞・文と文、段落の関係)

空欄Xは、ウが適当である。空欄の後では、常識的な価値観を持っている人の生き方の例として「成功者として生きることに価値がある」とすることを挙げている。そのため、ここには例示するときの接続詞を入れる必要がある。答えはウの「例えば」になる。

空欄Yは、オが適当である。空欄の前では、一度きりの人生なのだから、自分の好きに生きてよく、人の期待を満たすために生きているのではないというエクセントリックな生き方を例示した文章である。

一方、空欄後では、自分ではエクセントリックな人生を生きようとしなくて、エクセントリックな生き方をする人がいれば、その人生の行く手を阻もうとするという内容になっており、空欄前と論旨が異なる。

### 問五 口語文法の知識と理解

1はまず文法の学習用語である「付属語」を定義とともにおさえられているかを問うている。付属語とは、自立語に続くことで関係や意味を補足するもので、活用のある助動詞と助詞が含まれる。指

摘部分のうち、「られ(らる)」「た」「よう  
な」が助動詞、「は」「の」「を」が助詞で  
ある。復習する際は、それぞれの意味用  
法を細かく理解確認し、最終的には一覽  
レベル覚えて読解に活かせるレベルまで  
学習してほしい。

1は「単語」についての話題であった  
が、2の「文の成分」は「文節」に関わる  
学習用語である。文の成分とは、一文を  
意味が不自然にならない程度に短く区  
切ったものであり、「主語―述語の関係」  
をはじめ複数の関係が存在する。これに  
についても学習用語の定義をおさえ、何を  
テーマとして問われているかを把握し、  
関係を考える習慣を磨いてほしい。今回  
の文節は「ものでは」「なく」に区切られ、  
「なく」のものは(形式)形容詞が上の文  
節に意味を補足しているため、補助の関  
係と判断できる。

3は単語の話題に戻り、先に述べた「活  
用の有無」についての理解を問うている。  
「活用が有る」とは語が別の語に接続す  
る時、形が変化する語のことを指す。自  
立語で活用があるものを用言(品詞とい  
えば動詞・形容詞・形容動詞)、付属語で  
活用がある語は助動詞でした。3のうち、  
「形成し(する)」「なり(なる)」「は動詞、  
残りの「なけれ(なし)」「ませ(ます)」「  
ん」は助動詞である。1でも述べたよ  
うに、特に助動詞の識別が難しかったと  
思われるので、細かく学習(復習)してほ  
しい。

4は敬語の種類と、それぞれの用いら  
れ方(敬意の方向)の理解について問わ

れている。尊敬語は語り手(書き手)から  
動作をする人に対する敬意を表し、謙讓  
語は反対に動作を受ける人に対する敬意  
を表す(へりくだって相手を高めると同  
義)。丁寧語とはもとは謙讓語であった語  
の敬意の対象意識が薄れ、慣例的に用い  
られていくなかで丁寧語に近い意味を有  
するようになったもの。丁寧語は聞き手  
や読み手に対する敬意を表す語。「なりま  
せん」の「ませ」は丁寧の助動詞「ます」  
であり、筆者から我々読み手に対する敬  
語表現である。

#### 問六 内容と文章表現に関する理解

本文全体を通して、文章表現の工夫に  
より解釈に与える影響を考察する問題で  
ある。

アについて、本文では「思う」や「思っ  
ている」ではなく、「思い込み」の語を用  
い、常識的に生きる人々を批判している  
ため、選択肢は定義や対象が誤っている。  
イについて、呼応の副詞により強調効  
果が加えられている二例が挙げられてい  
る。人生は当然エクセントリックであり、  
かつてトロイメルだった者が後進のトロ  
イメルの行く手をふさぐようになってし  
まう点に留意させている。

ウについて、二重否定は強い肯定を表  
し、対比の効果も片方(特に後者を)強調  
する効果がある。本文の筆者は内容を論  
理的に展開するだけでなく、ア・エに見  
られる様々な基本的修辭を用い、我々読  
者に対し敬意を以て説明を試みている印  
象をうけます。

エについて、肯定的意味合いの強い語に少し否定的な語と同時に用いることで皮肉を込めた否定的な意を伝えている二例。

問七 要旨と構成・展開に関する理解

アについて、本文で筆者は三木の説を複数の目的に基づいて引用しているが、話題(テーマ)の提示や、自説の正当性を証明する論拠として用いたりします。しかし、終盤で筆者は三木には言及されていない自身の意見を述べているため、終始一貫して三木をなぞっているわけではない。

イについて、前半から中盤にかけての記述は概ね本文の内容と合致しているといえそうだが、中盤から後半にかけての記述はややテーマから飛躍して逸れ、最後に至っては論点が異なってしまっているため誤り。

ウについて、前半から中盤にかけての記述は概ね本文と整合性がとれるが、こちらにも終盤にかけては「逆説的状况」をよろしくないと、その是正が必要だと筆者とは主旨がずれていっている。

エについて、エクセントリックな生き方と対照的な生き方を説明し、本来人間はエクセントリックに生きるものであるがそうなり難くなっている理由を示し、それによって失った個性を取り戻すためにエクセントリックな生き方を推奨する結びとなっている。微妙な違いですが、筆者はエクセントリックを推奨しているだけで、常識的に生

きる人々が生き方を改めるべきだ、とか間違っているなどは述べていません。自分の大雑把な主観的解釈ではなく、あくまで語と論理、展開に対し論理を意識し、論理展開や構成の理解をもとに、より客観的な解釈を目指すために緻密に読み、考え、表現できるようにしよう。

【二】小説(文学的文章)

〈出典〉『卵の緒』

母が自分にへその緒を見せてくれないことを証拠に自分が捨て子だと主張する「僕」に、母は卵の殻を見せて「僕」を「卵で産んだ」と言う。様々な家族模様がある中で、「親子」の強く確かな絆を描く作。今回の題材は同著に収録されている別の作品。家庭の事情から、二人きりで暮らすことになった異母姉弟が主人公で、初めて会う二人はぎくしゃくしていたが、やがて心を触れ合わせていく(「Is a loop」)。優しい気持ちになれる感動の作品集。

〈著者〉瀬尾まいこ

一九七四年、大阪府生れ。大谷女子大学国文科卒。二〇〇一年、「卵の緒」で坊っちゃん文学賞大賞を受賞し、翌年、単行本『卵の緒』で作家デビュー。『幸福な食卓』で吉川英治文学新人賞を受賞する。

問一 本文中での語彙の用いられ方

A～Dまで、まずは辞書的意味を確認してほしい。その際、漢字の読み書きや、何故その意味になるのか構造や背景まで

気にして学習していこう。その後、とりわけ復習の意味をもった語などでは、本文中ではどのような意味で用いられているか論理的に検討する必要がある。選択肢内の言い換え表現まで含めて、語彙は絶え間なく関連づけを行いつつ学んでほしい。

## 問二 心情の根拠（因果関係）の理解

七子が「夜は不思議だ」という心情に至った理由として、傍線部後「日頃使わない力や感情を動かしてくれる」とある。

「夜」は七子の中から煩わしいという感情を消し、七生と何も話さずただ歩いているだけなのに「七生が楽しいのもわかった」し、七子が「楽しいと思っているのも七生に伝わっていた」ように感じていた。普段の七子は、苦手な犬の出現に対して、「強気にやり過ぎす」が、七生と二人きりであることに加え、静寂な夜の空間が、七子を素直にさせ、七生を頼ることになったと読み取れる。したがってウが正しい。

残りの選択肢について、アの静けさは右の効果を狙ったもので、単調なリズムや効果を狙っているわけではない。イの視覚を制限することで他の感覚が研ぎ澄まされることはあるが今回は関係がない。エの夜の描写と七子の感想だけでは伏線として機能せず、狙いも適切でない。

## 問三 小説の舞台装置や工夫の意図

犬が苦手な七子にとって野犬の出現は、不安を感じさせるものだったが、特殊な

状況下で自分を振り返る機会をもたらし、七子のことを気遣いながら行動する頼れる七生という存在について考えるきっかけになった。そして、亡き母が七子に七生との繋がりを残してくれたことに気づくことつながっていく。よって、選択肢エが適当。

残りの選択肢については、アの七子が自分の弱さを自覚する箇所はよいが、七生に対する理解に誤りがある。イは七子の自己認識に不足がある点や、七生に頼もしさを感じた後の気づきの内容が誤っている。ウは対照的な性格が故に補い助け合って生きる必要性について書かれているが本文の趣旨とは逸れる。

## 問四 心情の変化や推移の理解

傍線部③から④までの間には、野犬の恐怖から解放された後、七子の感情が乱れる場面がはさまれるが、③↓（右の場面）↓④の心情の推移を理解して説明できるようにしよう。要約すれば、「七生の配慮に触れ頼れる繋がりの存在に安心する↓家族との繋がりに関する様々な不安から解放され、訳も分からず感情があふれる↓感情の正体は母親が七生を引き取った真の理由⇨確かな繋がりの存在に気づく、といった流れとなっている選択肢ウが正解。

残りの選択肢については、アが七子と七生の関係が「秘密の共有」や「名前の共通性」に焦点があたってしまい要旨と異なっている。イの共感が高まっていったことは表現されておらず、七子の感情も

悲しみのみではなく根拠も誤っている。エは冷静さや余裕は取り戻せておらず、本文では逆に七生に心配される七子が表現されている。

#### 問五 主題の理解

傍線部の後、分かった実感を繰り返して更に後に分からなかったこと⇨何故母親が愛人の子どもを引き取ったのか、について考える過程が示されている。「引き受けた理由は、ただひとつ」に注目し、血の繋がりがや一緒にいる理由のやりとりがはさまれるが、我慢強く結末まで読み進めよう。誰とも繋がっていない寂しさを思い返し、それを憐（はかな）い繋がりとし、母が七子を一人にして寂しい思いをしないように、七生との確かな繋がりを結ぼうとしたことに考えが至っている。この過程を踏まえるとウが正しいと判断できる。

残りの選択肢ア・イについては名前の類似性については七生との関係を考える仕掛けにはなっているが、わかったことには当てはまらない他、見当違いな要点⇨述語部分になっている。ア・イを選択して誤ってしまった受験生はなんとなく知っている言葉のみにして大雑把に読んでいることが原因だと思われるため反省されたし。エの記述は部分部分では記述がみられなくもないが、事実(定義)誤認をした説明の選択肢となっており、趣旨も誤っている。

#### 問六 情景描写の理解

暗かった夜は苦悩や不安を抱えた七子

の心情を象徴しており、散歩や野犬に追われる事件や七生との交流を経て、死んだ母親の思いに気づき、残された繋がりにある七生の存在とともに生き方に明るい兆しが見えてきたことを夜明けの描写と重ねて表現しているアが正解。

残りの選択肢について、イは「完全に」過去と決別できたかどうか、末尾の描写だけでは分からない。他の部分に根拠が見られればよいが、見当たらないため、飛躍した読み(客観性に乏しい読み)だといえる。ウは嫌なことから「夜が長く感じられた」点や「人付き合い」を嫌だと感じていた点をなどは本文に見られないため不適。エは夜の散歩とイメージと七子の思いが重なっておらず、また夜⇨朝の時間の経過が何かを忘れさせたり変えたりすることについて述べているが、全く当てはまっていない。

問七 本文中の表現の特徴や工夫の意図アについて、問二で考えた「夜」の場面設定の意図と同様に、見知らぬ土地に二人を置き、日頃と異なる点を意識させようとする意図が考えられる。

イについて、末尾の七生が自分の母親について語る場面を除いては、全体的に七生と七生の会話は短くなっている。内容もさることながら、冗長でない点からも七子の緊張や不安が伝わってくるが、七生の子供っぽさを表現しているわけではない。心中語の少なさも、基本的に視点や語りが七子で、小説の要点のプロットや描きたい部分も七子にあると考えら

れるからである。

ウについて、会話文もそうであるが、地の文も端的な口語的表現が目立ち、七子の心情の推移が理解しやすくなっている。それに対し、中盤からは回想をはじめ七子の心情描写を細かく描く部分が増え始め、前者と対比されて七子の心情の印象が深まっていると考えることもできる。

エについて、七子の感情が訳も分からずあふれる場面については、七子にとってはその前後できっかけや理由を考えた過程とともに自覚されていくが、表面的にはせわしなく感情が変わっているようにしか見えない七子を見て、七生は戸惑い、理由ばかり訊ねてばかりいる。七子に優しくしている指摘を受けるまでは、七生が七子という理由や自分の母親が自分という理由を述べておらず、当然のように説明して逆に訊ね返す様子もうかがえる。以上二点を踏まえると、二人の繋がりを自明のものとして捉える七生と感動とともに徐々に繋がりについて気づきを得ていく対照的な姿が浮かび上がり、とりわけ後者の七子の気づきや変化が主題として強調されているといえるだろう。

### 【三】 古典（古文と漢文の読解）

〈出典〉

#### Ⅰ 『和俗童子訓』（巻之二）

宝永七年（一七一〇年）、貝原益軒（か  
いばらえきけん）の著。益軒は日本の儒  
学者で、本書は益軒の思想のまとめだけ

でなく、日本ではじめてのまとまった教育論書としての評価が高い。益軒の活躍した時代は日本の朱子学（儒学の一つ）の祖である林羅山や山崎闇斎、陽明学（前同）の中江藤樹、本来の儒学にならう古学の山鹿素行や伊藤仁斎が活躍しており、中世から近世の社会へ移行に儒学が影響を与えた頃と重なる。無論、儒学や朱子学は本来中国古典、漢文の中でも必須の教科目であり、益軒の思想や『和俗童子訓』にも多くの影響が見られる。

#### Ⅱ 『貞観政要』

唐代を代表する歴史家呉兢（ごきょう）の著。「貞観の治」と呼ばれる太平の世を実現した太宗の言行を記録した書。呉兢の生きた時代は骨肉の争いによって政治的混乱が続き、それを治めた太宗への顕彰と唐以降の王権の安定のために書かれた。日本においても世が乱れた時、天下太平の世を目指すにあたり多く読まれてきており、頼朝や家康、明治天皇から現代のリーダーに至るまで参考にしてきた例は数多く存在する。

問一 歴史的仮名遣いと現代仮名遣い  
表題の規則をまとめると左のようになる。

語頭を除く「は・ひ・ふ・へ・ほ」↓

「わ・い・う・え・お」

例：…あはれ↓あわれ

「ぬ」・「ぬ」・「を」↓「い・え・お」

例：…ぬなか↓いなか

「ぢ・づ」↓「じ・ず」

例…はづかし↓はずかし

「くわ」↓「か」、「ぐわ」↓「が」

例…くわし↓かし

「—au」↓「—ou」

例…まうす↓もうす

「—ju」↓「—yu」

例…あやしう↓あやしゅう

「—eu」↓「—you」

例…けふ↓きょう

以上の規則を踏まえ、a「ならはし」は「ならわし(習わし)≡慣習の意」と書き改め、b「たふとみ」↓「たうとみ」↓「とうとみ」の読みを参考に、「尊み(貴み)」と想定し、本文脈に合うかたちでエ「重宝して」の意味だと判断すればよい。

## 問二 既習古典作品の知識理解

「さらなり(更なり)」は「言うまでもない」の意で、受験生は『枕草子』の冒頭の学習で登場する。『枕草子』では言うまでもなく「をかし」等が省略されており、それを記述や文脈を頼りに補いながら読む必要がある。ここでは「さらなり」を含む一文の冒頭「いはんや」に注目し、「ましてやくなおさらだ」の内容はこれより前の内容と想定されるため、直前の一文の「よき人となりがたし」と判断できる。

## 問三 古文の解釈(因果関係)

傍線部をはじめ**I**の古文の解釈は全体的に平易だと思われる。古文↓現代文への翻訳に割く努力≡時間が必要ないため、内容読解は大1、二問同様に論理的かつ客観的なものとなるよう心掛けてほ

しい。傍線部②の「背きて、争ふ」≡次文「(諫めをききて)怒れば」と考えられるため、直後の「重ねてその人、いさめをいはず」が傍線部の理由となる。せっかく指摘注意している(注意してくれている)にも関わらず、今風で言うところの「逆ギレ」などされてはかなわない。日頃そういう態度で過ごす人は人が離れていつてしまい結果損な生き方となってしまいうだろう。

## 問四 対比(比較)表現(修辞)と語彙

傍線部③は「善(では)これ(直前内容)より大きいものはない≡最善である」と解釈できる。まず、「善、」の直後に助詞を補う(古文は助詞の省略が多い特徴を踏まえ)、これ(指示語)の内容を補う技術態度が身に付いていることが大切である。そのうえで、「大なるはなし」の対比(比較)表現から最善≡注意を喜んで聞き入れて誤りを改めることと判断できる。右の内容は更にその前の一文、「大いに身の益である」からも読みとれる。

さて、この趣旨に合致するものとして、受験生にとってはエの「良薬は口に苦し」が最もなじみ深いのではないか。イ「忠言耳に逆らう」も同様の意であり、「真心」からの注意は厳しいものが多いのだろうが、善だとしても受け入れ難いものなのだろう、昔も今も同じということか。残りの選択肢中の語句の意味も、由来や語の構成まで理解して定着させよう。

## 問五 要点と飾り(修辞)の効果



\*7 「だに」 Ⅱ 「くでさえ」を参考にし、傍線部を解釈すると、「少しの食べ物を贈り物とする」、(それ) でさえ(贈られた人は)喜ぶものである(慣習≒通常)。次の一文は「ましてや、注意をしてくれる人(Ⅱ前出、身の益)は、(まして)喜び大切にすべきである」と続く。

解釈はさておき、筆者の意見(要点)と右の解釈のつながりを考えると、傍線部分を含む前半は飾りで、後半が要点であることが分かるはずだ。その前半は、「贈り物Ⅱ少しの食料(でさえ)↓喜ぶ」と程度の低いものでさえ喜ばれるのであるから、本文脈から伺える「注意をしてくれる人や注意自体は」はまして貴重なものである、と要点を強調する役割を果たしている。

#### 問六 漢文の訓読

受験生にまず確認してほしいことが、「白文」「訓点」「訓読(文)(する)」「書き下し文(書き下す)」等の定義の理解と学習語彙の定着である。この学習語彙の定義をきちんと理解して学習を進めないとつまずく場合が多い。「訓点」はさらに「返り点」「送り仮名」「句読点」に分けられるがこちらの定義は理解定着できているか、解答にあたって確認しておいてほしい。

さて、漢文も日本語と同様、縦書きの場合上から下に読む。また、返り点のうち「レ点」は一字返って読み、「一、二点」は二字以上返って読む場合に用い、漢数字が読む順番を表している。右の理

解を基に、受験生は学習の中で訓読の練習を重ね、レ点が続く文の訓読など読み慣れて受験を迎えてほしい。

#### 問七 和漢の比喩表現

日本のことわざにも、「魚心あれば水心Ⅱ(相性がよく)非常に親しいさま、の意」があり、こういった表現は大陸の文化(詩文)を由来としていると思われる。ここでは魚と水(この際厳密な対比区別はしないが)の相性がぴったりなように、後述する「正主」と「正臣」(無論、「邪主」と「邪心」もぴったりではあるが)の「正しい志が合わさることで、その時世は安泰になろう」と続く。

#### 問八 複数文章の対比読解と推論思考

- 1 古文でいうところの「家を保つ」は、他人からの注意を喜んで受け入れる人は誤りも少なくなる↓身や「家の安泰を保つ」といった解釈である。次に漢文では注意をする側と受ける側の境遇に違いはあるものの、侍臣の諫言を太宗が聞き入れる↓「国家を安泰にする」となり、五字の条件には末尾の「致天下太平」が解となる。

- 2 では先延ばしにしていた、今回の漢文における「正」とは何か。古文の内容を踏まえて考える点、漢文の上下君臣が「正」「邪」異なれば理を通すことのできない点、天下が安泰となるためには君主に対する侍臣の率直な諫言(や議論)が必要だという

点を鑑みると、「正」とは君主であれば諫言を聞き入れること、侍臣であれば率直に諫言することと考えられる。

3 2をもとに、「正臣」が君主の耳に逆らうような内容であったとしても率直に諫言する人物だと分かれば、その反対、君主の考えや機嫌におもね正直な考えを伝えない人物が「邪臣」ということになる。この人物像に合致する語は受験生になじみがあるであろうエ「付和雷同」、そしてやや難しいだろうが、語の構成から(表)一面は相手に従い、腹(心)の内では相手に背く態度のキ「面従腹背」が正しいと分かる。

### 【現代語訳】

#### I

子どもの時は、悪い癖や、悪い慣習などがあることを、自分で悪いことだと知ったならば、二度と行うべきではない。また、このような悪いことを、人に注意され、戒められた時は、喜んで早く改善し、後々まで、長らくそのことをすべきではない。一度注意されたことは、長心に留めて、忘れてはいけない。人から注意を受けておいて、改善せず、すぐに忘れてしまう人は、「守」がないと言ってもよい。守がない人は、よき人にはなり難い。ましてや、人からの注意を嫌い、怒り恨む人は、言うまでもない。(よき人にはなり難い。)人からの注意を聞いたら、喜んで受けるべきだ。必ず怒り背いたりしてはならない。注意を聞いて、もし喜

んで受け入れる人あらば、(その人は)善人であり、よく家を保つことができる。注意されることを嫌い、防ぐ人は、必ず家を壊す。これは善悪の分かれる所である。注意されたことで、道理になつていないことがあっても、背いて、争ってはならない。注意を受けて怒ると、二度とその人(注意をしてくれた人)は、注意をしてくれなくなる。一般的に注意を聞き入れることは、大いに身に有益である。注意を受けて、喜んで受入れ、自分の過ちを改めるのは、最善のことである。人の悪事は多いけれど、(それへの)注意を嫌うことは最悪である。自身の悪いところを指摘し、自身を注意してくれる人は、大切にし、親しくしたほうがよい。少しの食べ物贈ることさえ、喜ばれるのが通例である。ましてや、注意をしてくれる人は、とても喜び大切にすべきである。

#### II

### 【現代語訳】

貞観元年、太宗は臣下に向かって述べたことには、「正しい君主は、邪臣に(治を)任せると、道理を通すことができな。正しい臣下が、邪主に仕官すると、同様に通りを通すことができない。君臣(の志が)共に同じであることが、魚と水の相性のようにあれば、世を安泰にできるであろう。私は賢明ではないが、幸いにして諸侯(皆)が時折正しく救ってくれる。願うことには、私への率直な意見と強固な議論によって、天下を太平にして

いきたいのだ」と。

【書き下し文】

貞観元年、太宗侍臣に謂ひて曰はく、  
「正主、邪心に任ずれば、理を致す能はず。正臣、邪主に事ふれば、亦た理を致す能はず、惟だ君臣相遇ふこと、水魚に同じきもの有れば、則ち海内安かるべし。朕明ならずと雖も、幸に諸公数（しばしば）相匡救（きょうきゆう）す、直言鯁議に憑りて、天下を太平に致さん。